

平成24年度 本郷中学校  
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含みます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【一】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みを、ひらがなで答えなさい。  
 なお、答えは、ていねいに書くこと。

- ① 議会で熱弁を奮う。
- ② 彼と私はチクバの友だ。
- ③ 巨額の資金をツイやす。
- ④ これはゲキヤクである。
- ⑤ 祖母の還暦をイワう。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間と自然の失われた調和を取り戻す——この言葉は、「地球にやさしい」というキャッチフレーズと同じように、美しい表現かもしれませんが。けれど、現在の環境問題を考えるとき、はたして適切な言葉と言えるのでしょうか。そもそも、この表現の基礎にある疎外論<sup>注1</sup>の発想は、有効な論理を提供するのでしょうか。

疎外論をとる場合、陥りやすい危険は、歴史のネジを逆に回し、未来ではなく過去へと回帰することです。<sup>注2</sup> エコロジーで、「自然との調和を取り戻す」と語られるとき、じつさいには過去の「原初的な調和」へ舞い戻るにすぎないのです。人間中心主義を批判して、牧歌的な自然が称賛<sup>注3</sup>されるとき、目標とされたのは過去にほかなりません。極端な場合には、近代の科学文明が否定され、原始的な生活を提唱するようにさえ見えます。

しかし、「疎外論」が前提とするような、原初的な「自然との調和」というモデルが、怪しいのではないのでしょうか。こうした状態が、はたして存在したことがあるのでしょうか。現在以前の、いつの時代に、そのような「人間と自然の調和」が成立していたのでしょうか。『啓蒙の弁証法』<sup>注3</sup>も明らかにしたように、人間による自然支配は、ある意味では文明化とともに始まった、と言えます。人間が知力を使って自然とかわるかぎり、自然支配の欲望は不可避<sup>ふかひ</sup>なのです。

とすれば、人間の歴史をどこまでさかのぼっても、原初的な「人間と自然の調和」には達しないのではないのでしょうか。むしろ、ハッキリいえば、こうした「原初的な調和」なるものは、後になって理想化された状態にほかなりません。ニーチェだったら、おそらく「捏造された」と表現するでしょう。人間中心主義を批判する人たちは、自分たちのロマンチックな自然への憧れ<sup>あこが</sup>を、あたかも原初的な状態であるかのように空想（捏造）したにすぎないのです。

しかし、こうした自然への憧れが、近代の豊かな社会のもとで発想されることに、注意すべきです。それは、たとえば、都会で裕福に生活している人が、ときどき田舎<sup>いなか</sup>の生活に憧れるようなものです。つぎのようなエコロジストの記述を見ると、その感覚が強くなるのではないのでしょうか。

自分で井戸から運んだ水や自分で集めた木々と共に、田舎にある自分のコテージにいる時には、どんな金持ちよりも豊かだと感じます。ヘリコプターに乗って山頂に行つたとします。景色は絵はがきのように見え、頂上にレストランがあれば、食べ物がいちやんとできていないと不満を言うかもしれません。でも、もし苦勞してふもとから登つたならば、深い満足感を味わって、スキーのワックスと砂が混ざつたサンドイッチでさえ、すばらしく美味いと思うはずです。

(ネス『手段は質素に、目標は豊かに』)

1、「頂上のレストラン」と「砂混じりのサンドイッチ」を対比するのは、裕福な一部の人々にしか意味をなしません。いつもレストランで美味しいものを食べている人には、「砂混じりのサンドイッチ」もたまには美味しく感じられるでしょう。しかし、自分のコテージももたず、ヘリコプターに乗ることもなく、土ぼこりのする道路脇で「砂混じりのサンドイッチ」を食べる人にとって、それは美味しいのでしょうか。

少し視野を広げて考えてみましょう。疎外論的発想で、「自然」への憧れを語るとき、前提されているのは、「人間」との二元的な対立です。「自然」を「人間による支配」から解放することが、目標にされています。しかし、この対立そのものが問題なのです。

2、「自然」と「人間」の対立は、古くから常識的になってきました。「自然」と「人工」は、しばしば対義語として使われますし、「自然」と「文化」の対立も、同じように考えられます。人為的ではない「自然」に対して、「文化」が人間的現象であることは、いわば定義に属しています。そのため、エコロジーでも「自然」を考えると、人為的ではない「自然」が想定されてきたのです。

しかし、すでに確認したように、人間抜きの「自然」とは抽象的な虚構にすぎません。人間が眼前に見いだす「自然」は、それに先立つ世代によって手の加えられてきた「自然」であって、「社会的形成物」と表現できます。「自然」はつねにすでに、多くの人々によって手が加えられ、また今後も手が加えられていきます。人間の活動を離れて、「自然」が独立にあるわけではありません。その意味では、「自然」は、「文化的形成物」と呼んでも、間違いではないでしょう。

このように考えると、実践的な方向についても、重大な指針が示されるように思えます。いままで、環境保護のためには、人間が自然にできるだけ介入しないことが、求められてきました。人間が自然から手を引くことが、エコロジーだというわけですが、ところが、そんなことは、そもそも不可能です。望ましいわけでもありません。むしろ、人間が自然をどう管理していくかが重要なのです。それを理解するために、アルド・レオポルドの『野生のうたが聞こえる』を見ておきましょう。

レオポルドといえば、自然保護の原理を打ち出した実践家として、きわめて有名です。彼の原理(『土地理論』)は、多くの場合、人間中心主義を批判するものとして理解されてきました。たとえば、彼はつぎのように語っています。「土地理論は、ヒトと各種の役割を、土地という共同体の征服者から、単なる一構成員、一市民へと変えるのである。」しかし、この立場は、自然にいつさい手を加えないことを主張してはいません。レオポルドは、『野生のうたが聞こえる』の最後を、次の言葉で結んでいます。

まとめて言うならば、われわれの現在の問題は、土地に対してどういう姿勢でのぞみ、どう使用するかということである。われわれは蒸気シャベルを用いて、かつては人力でつくられたアルハンブラ宮殿を改修しようとし、その規模の壮大さを感じている。そのシャベルをとて手放す気になれない。われわれに本当に必要なのは、そうした道具を有効に使うための、もっと穏やかで客観的な基準を持つことなのだ。

(レオポルド『野生のうたが聞こえる』)

レオポルドの仕事は「森林管理」ですが、彼はその経験を通して「土地倫理」を形成したのです。その点では、人間の介入しない「土地倫理」はあり得ない、と言わなくてはなりません。

3、「自然」にどうかかわればいいのか。ブライアン・ノートンという環境保護論者は、『持続性』という本のなかで「適応的管理」という概念<sup>がいねん</sup>を提出しています。彼は、「環境<sup>注4</sup>プラグマティズム」の立場から「人間中心主義」を唱え、自然に対する「管理」を力説しています。しかし、「管理」といつても、あくまでも「適応的管理」であって、従来批判されたような「人間中心主義」ではありません。では、どんな「人間中心主義」が擁護<sup>ようぐ</sup>可能なのでしょうか。

「人間中心主義」とは、「人間の利益実現を中心に置く立場」を意味します。しかし、このとき「人間の利益」をどう考えるかが問題です。たとえば、ある種の生物が食糧<sup>しよくりょう</sup>として「経済的な利益」になるからといって、乱獲<sup>らんかく</sup>してしまえば絶滅<sup>ぜつめつ</sup>してしまい、結局は「経済的利益」に反します。そこで、「経済的利益」のためにも、生態学的観点が必要になります。しかも、「人間の利益」を「経済的利益」に限定する必要もないでしょう。「人間」が多面的に理解できるように、「人間の利益」も多様な側面から理解できるからです。人間の生存にとって、きれいな水や土壌や空気などは、人間の利益と言えます<sup>6</sup>。

また、「人間の利益」という場合、しばしば誤解されるように、個人の欲求を抑制<sup>よくせい</sup>することもあるでしょう。あるいは、将来世代のために、現在の利益が制限されることもあります。その点では、「人間中心主義」だからといって、現在の個々人の欲求をそのまま認めるわけではないのです。ぎやくに、長期的な視野に立って、広い観点から利益を考慮<sup>こうりょ</sup>する必要があるわけです。さらに、「人間中心主義」は「精神的価値」についても否定しません。かつては、「人間中心主義」といえば、物質的欲求だけをもち、精神的価値を排除<sup>はらいじょ</sup>すると、見なされてきました。しかし、ノートンも言うように、「人間中心主義者」たちは、しばしば自然を精神的に評価しています。

いままで、「人間中心主義」を批判するとき、「人間」が「自然」を「搾取<sup>注5</sup>」するといったイメージで、考えられてきました。人間の利益を実現するには、自然の生態系を無視できませんし、短期的な視野から自然を開発しても、長期的にはかえって不利になることも多いのです。むしろ、自然に適応する形で、長期的な観点から自然を管理すべきことが、目指されています。

このように考えると、自然を理想化して人間中心主義を反省しても、問題の隠<sup>かく</sup>ぺいにしかならないでしょう。むしろ、いま必要なのは具体的な問題のなかで、広い視野に立って長期的な観点から自然を管理することではないでしょうか。

(岡本裕一郎『12歳からの現代思想』より)

注1 疎外論的発想……ここでは、現状を克服し、本来的な自然との調和を取り戻そうとする考えのこと。

注2 エコロジー……自然環境保護運動。

注3 『啓蒙の弁証法』……戦後、ドイツ人のホルクハイマーとアドルノによって書き著された近代批判の研究。

注4 プラグマティズム……ここでは、自然環境は人間の役に立ってこそ意味があるという考え。

注5 搾取……何の対価もなしに(＝無償で)しぼり取ること。

問一

1 3 の中に入れるのに最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

|   |      |   |     |   |     |   |     |
|---|------|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | たしかに | イ | やがて | ウ | そして | エ | だから |
| オ | では   | カ | しかし | キ | つまり | ク | さらに |

問二 次の一文は問題文中から抜き出したものです。抜き出された文の直後にくる最初の五字を答えなさい。

しかし、現在では、このようなイメージで「人間中心主義」を無邪気<sup>むじゃき</sup>に主張する人はほとんどいません。

問三 — 線1「危険」とありますが、なぜ筆者は、「危険」だと言っているのでしょうか。その理由として考えられるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 過去の原初体験を思い起こすことによって、自然破壊という現実の問題から目を背けるようになるから。
- イ 実際には歴史のネジは逆には回らないのに、あたかもそれができるかのように嘘をつくようになるから。
- ウ 自然環境の保護にばかり目を向けて、人間の生活の未来のあるべき姿を考えなくなるから。
- エ 過去のありもしない理想を語ることで、人間と自然との関わりの本来の姿が見えなくなるから。

問四 — 線2「牧歌的な自然」とほぼ同じ意味で用いられている表現を問題文中から十一字で抜き出して答えなさい。

問五 — 線3「こうした自然への憧れがく注意すべきです」とありますが、なぜ注意すべきなのでしょう。ネスの記述を参考に、その理由を解答らんに合う形で十字以内で答えなさい。

問六 — 線4「しかし、この対立そのものが問題なのです」とありますが、どのような点で問題のですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「人間」と「自然」とは、本来、対立するものではないから。
- イ 「人間」と「自然」ではなく、「人工」と「自然」の対立ととらえなければならないから。
- ウ 同じ自然でも、人間抜きの「自然」と原初的な「自然」とを区別するべきだから。
- エ 古くから常識的なこの対立は、今後も果てることなく続いていくと思われるから。

問七 — 線5「実践的な方向についても、重大な指針が示される」とありますが、ここでの重大な指針について述べている部分を問題文中から三十五字以上四十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問八 — 線6「きれいな水や土壌や空気などは、人間の利益と言えます」とありますが、どのような点で人間の利益と言えるのでしょうか。問題文を参考にその多様な側面を六十字以内で答えなさい。

問九 次のア～エを読んで、問題文の内容に合致するものには○、合致しないものには×をつけなさい。なお、全て○、または、全て×で解答した場合は、全て不正解とします。

- ア 「疎外論」をとる場合、原初的な「自然との調和」とは、人間による自然支配を目指そうとする考えである。
- イ これからの社会は、できるだけ人間が自然に介入しないことが求められる。
- ウ 筆者の考える「人間中心主義」ならば、広い視野から自然を管理することができるはずである。
- エ 自然を理想化したうえで、今後は「経済的利益」といった観点から自然を管理することが必要である。

問十 筆者の考えをふまえると、問題文の冒頭にある「地球にやさしい」というキャッチフレーズは、むしろ「 にやさしい」と言い換えたほうが適切なようです。そこで、 にふさわしい二字の熟語を問題文中から探して答えなさい。

【三】 次の文章をよく読んで後の問いに答えなさい。

中庭には、イチヨウが三本並んでいる。ちょうど一週間前から黄色く色づき始め、昨日とうとう真っ黄色になった。陽光を浴びたイチヨウの葉たちは黄金色に染まり、それが秋風に揺れてきらきらと輝く。

僕ら三年A組の教室は校舎の三階にある。イチヨウの木たちは大きくて、校舎とほぼ同じ高さだ。だから、窓からイチヨウを眺めると、彼らと目線がいつしよであるように感じる。そして、彼らが秋の高い青空を背景としたとき、その光景は美しいだけじゃなくて、不思議と心に残るのだ。

そのことを楓に話したら、彼女はこう言っていた。

「きつと補色の関係にあるからじゃないかな」

補色は美術の時間に習った。色相環<sup>注1</sup>において反対側にある色同士を、補色の関係にあると言うそうだ。代表的なのは「青と黄」や「赤と緑」だ。補色の関係にある色を並べると、色味を強調し合って鮮やかに見えるのだとか。なるほど、と僕は楓に感心してしまった。

現在、楓といっしょに登下校することが多い。同じ団地に住んでいるので、よくいっしょになる。ただ、彼女には三年間ずっと寝たきりの弟さんがいる。弟さんである比呂人君<sup>ひろと</sup>は、三年前に交通事故に遭って以来ずっと意識が戻っていない。彼女は昏睡状態の比呂人君のそばに少しでもいっしょにいてあげたくて、すぐに家に帰ってしまう。僕と彼女の仲が進展するような時間的余裕はないし、そもそも片思いのレベルから脱するような勇気を、僕は持っていない。

A。そう思いながら、イチヨウの木から、楓の後ろ姿に視線を移した。A組において完全に孤立しているというのに、彼女は気にするふうでもない。クラスの連中にどう思われようとも、比呂人君のために真っ直ぐ家に帰る。つき合いが悪いと陰口を叩かれようとも、融通が利かないと嘲られようとも、彼女には関係ないのだ。その堂々としたところと、潔癖なところに、僕は憧れる。僕の彼女への好きという気持ちには、憧れの成分が多分に入っていると思う。彼女は本当に立派なのだ。

それに引き換え、僕は駄目だ。いつだって聞き耳をそばだてて、自分がクラスの連中の話題に上がっていないか気にしてしまふ。「リッツ」というあだ名を口にしていないか、びくびくしてしまふ。

僕は好きな楓のために彼女の味方になった、世界中を敵に回したってかまわない、人になんて言われようともかまわない——なんて思えばいいのだけれど、小心者であるために人の噂が気になってしまふ。いまだにA組の学校裏サイトであるトリプレアのチェックも欠かしていない。自分の携帯電話とパソコンのお気に入りには、しっかりとトリプレアのアドレスが登録してある。

トリプレアを覗けば、いつも必ずショックなことが書き込まれている。匿名掲示板<sup>どくめい</sup>なので、みんなハンドルネームで書きたい放題なのだ。それに、柳戸を中心とする取り巻き連中と、美玲<sup>みれい</sup>を中心とする女子のほとんどが、楓に対する誹謗中傷<sup>注2</sup>の書き込みを日に日にエスカレートさせている。読めば必ずつらい気持ちにさせられる。

それでも、なぜだか僕はトリプレアを覗いてしまふ。この説明のつかない心理はいつたいたなんなのだろう。人はたとえ裏でひどいことを言われていると想像がついても、それが本当かどうか究明したい生き物なのだろうか。傷ついてもいいから、真実を知りたいと願う生き物なのだろうか。

悄然<sup>しょうぜん</sup>としつつ再びイチヨウを眺めていると、背後から「リッツ」と呼ばれたような気がした。けれど、このクラスで僕に話しかけてくるやつなんていない。そう思っ<sup>2</sup>てイチヨウの葉の黄金色を見つめていると、背中を叩かれた。その大きな手と、むせるほどの衝撃で誰だかわかった。真悟君だ。

「おい、リッツ。呼んでるのにどうした。ぼうつとしちゃって」  
真悟君が僕の隣に並んで窓の外を見る。

「お、イチヨウを見たのか。すげえ色づいてるな。真っ黄色じゃないか」  
はしゃいだ声で真悟君が言う。しかし僕はそれどころじゃなかった。

三年A組において、僕は空気のような存在となっている。いることはいるが、いるとは見なされない存在だ。あえて無視を

するようなこともしない。空気を意識したり、無視したりすることなんて、日常生活においてあり得ないのと同じように。そんな存在の僕に対して、真悟君は話しかけてきた。存在していると見なしたわけだ。これはある意味、真悟君がクラスの空気を読まず、はみ出してしまったってことだ。

「知ってるか」

真悟君がイチョウの木を横目に見ながら、のん気に訊いてくる。

「なにを」

「現代はもみじって言ったら、紅って漢字と、葉っぱの葉を書くのが普通だよ」

「あ、ああ……」

いったいなんの話題かわからないが、クラスの反応を気にしつつ相槌を打つ。たぶん真悟君は、「紅葉」という漢字を書いて「もみじ」と読むのが一般的だと言いたいのだろう。

「けどな、奈良時代の『万葉集』じゃ、黄色の葉って書いて、もみじと読む歌が多かったんだよ」

つまり、「黄葉」で「もみじ」と読んだってことか。

「へえ」

返事もそこそこに、僕はそつと振り返ってクラスの様子を窺った。

3 ぐくりと息をのむ。誰もが僕と真悟君の会話に注目していて、じつと黙り込んでいた。その沈黙の意味をあまり考えたくなくて、僕は窓の外のイチョウに視線を戻す。真悟君はおどおどしている僕にも、クラスの反応にも無頓着なようで、楽しそうに話を続けた。

「でも、時代が下って、『古今集』<sup>4</sup>が作られた平安時代になると、もみじと言えば紅の字を使う歌が増えたんだよ」

「そ、そうなんだ」

「これっていろんな説があつてさ、奈良時代は黄色く色づく木が赤く色づく木よりも多かったとか、奈良時代は黄色に美を感じ

ていたけれど、平安時代になると赤のほうが美しいとされるようになったとか、『古今集』は中国の漢詩の影響を受けるようになったためとかって言われてるんだぜ」

「よく知ってるね」

「へへへ。実は昨日読んだ本に書いてあったことなんだ。聞きかじりならぬ読みかじりってやつかな」

真悟君は鼻の下を、人差し指の甲で擦りながら笑った。体が大きくて、彫りの深い顔をしている彼は、下手したら三十歳と申告すれば通用しそうなくらい大人びた容姿をしている。だが、指で鼻の下を擦るようなしぐさを見ると、やっぱり同い年なんだなと思う。

「リッツはさ、やっぱり『古今集』<sup>4</sup>のほうが好きだよ？」

いきなり真悟君がそんなことを訊いてくる。

「へ？」

質問の趣旨がわからなくて、間抜けな声を出してしまった。

「どういう意味？」と尋ねようとしたが、背後から女の子の鋭い声がした。

「真悟！」

怪訝そうに、「あん？」と真悟君が振り向く。悪い予感を覚えつつ僕も振り向いた。すると、美玲が両手を腰に当ててこちらを睨んでいた。

やばい。

噂では、真悟君と美玲はつき合っているらしい。美玲は自分の彼氏が、クラスののけ者である僕なんかと話しているのを、見るに見かねて声をかけてきたのだろう。

「ちよつと」

美玲があごをしゃくって真悟君を呼び寄せる。苛立つていることは、彼女がわざと出している低い声から明らかだった。

ところが、真悟君は美玲の苛立ちにまったく気づいていないようだ。

「ちよっと待っとけよ。まだリッツとの話が終わってないんだからさ」

真悟君は朗らかに言って僕に向き直り、「でさ、リッツ」と話の続きを始める。

やがて、真悟君は放課後僕と帰る約束をして、自分の席に戻って行った。放課後、僕と真悟君は、湘南の海岸線に沿った道を通り帰宅する。次の文章はその場面である。

「ところでさ」と真悟君が口調を和らげて言う。

「なに」

「リッツはどうなんだよ」

「なにが」

「昼間言った『古今集』のほうだよ」

真悟君はにやりと笑った。

「『古今集』のほう？」

「だから言ったろ。『古今集』のもみじと言えば、紅って漢字を使う紅葉だって。赤く紅葉するのは、いったいなんの木だ？」

「カエデでしょ」

あつと気づいた。昼間、真悟君は『古今集』のほうが好きだろ、と言ってきた。それは楓のことが好きなんだろ、と暗に含めて訊いてきていたのだ。回りくどいが、心憎い言い回しをする。

「好きなんだろ、楓のこと」

「いや、あの、そんな」

<sup>6</sup>しどろもどろになると、真悟君はやわらかく笑って、あとは江の島の幻想的なライトアップに視線を移した。変に茶化そうというつもりはないらしい。やさしいやつだ。いったい彼のどこが朴念仁だ注4 ぼくねんじんというんだ。

「それじゃ帰ろうか」

真悟君は立ち上がると、のしのしとデッキを歩いていく。その大きな背中に、僕はずっと言おう言おうと迷っていた言葉をぶつけた。<sup>7</sup>

「あのさ、真悟君はもう僕に関わらないほうがいいと思うんだよね。話しかけたりしないほうがいいと思うんだよね」  
ゆつくりと真悟君は振り返った。

「なんでだよ」

「真悟君はトリプレアって知ってる？ 三年A組の学校裏サイト」

「まあな」

「あそこで真悟君の評価がガタ落ちなんだよ。僕と話したりしたからさ。だから、今日は楽しかったけど、もうこういうふうなことはないほうが」

「知らねえな」

まだ僕が話している最中だというのに、真悟君は言った。

「美玲もあの掲示板をすげえ気に入ってる。自分がどう見られているか、どんな噂を立てられているか、必死にチェックしてるよ。発言にしても、髪形やファッションなんかについてもな。けどな、俺に言わせれば、あほくせえんだ」

「あほくせえ？」

「他人からの評価で自分の価値が決まるんじゃないやねえ。自分の価値は自分で決めるんだよ。自分でなにを努力し、なにを勝ち取り、なにを選択するのか、それで自分ってやつは決まるんだ。他人から見た自分の姿で、自分ってやつを決定するなんてあほくせえ

「だろ？」<sup>8</sup>

目から鱗が落ちたような気がした。僕は今まで、あの掲示板に振り回されすぎていた。みんなが書き込む僕の姿を、僕自身として受け入れるようなところがあった。

「……あほくせえ。うん、あほくせえよ」

そう言うと、真悟君が笑顔でずんずんと歩いてきた。

「ほら、帰ろうぜ」

真悟君は僕の背中を、ばんと叩く。その一撃は痛かったけれど、とても B た。明日からもっと胸を張って学校へ行けそうな気がした。

自分の価値は自分で決める。真悟君の言葉を口の中だけで唱えてみる。<sup>9</sup> 楓をかばった自分は、まちがいじゃないと強く確信した。

（関口 尚『イチヨウの眺め』より）

※この文章は、二〇〇八年六月初出による。

注1 色相環……色（色彩の種類）を色調の推移の順番に円周上に並べたもの。

注2 誹謗中傷……根拠のない嫌がらせや悪口を言うこと。

注3 悄然と……しよんぼりと。すごすごと。

注4 朴念仁……人情のわからない無愛想な人のこと。

問一 A に入れるのに最も適当なことを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 憎らしい

イ きびしい

ウ もどかしい

エ おかしい

問二 線1「僕はトリプレアを覗いてしまう」とありますが、「真悟君」はこの時の「僕」のように「トリプレア」に敏感に反応することをどのように考えていますか。問題文中から適当なことを七字以内で抜き出して答えなさい。

問三 線2「このクラスで僕に話しかけてくるやつなんていない」とありますが、なぜ話しかけてくる者がいないような状況になってしまったのですか。その理由を説明した次の文の空らん あ（二字）、い（二字）、う（七字）に

問題文中から適当なことを抜き出して答えなさい。

三年A組で、楓はつきあいの悪さからクラスの仲間から陰口をたたかれ、あした存在になっていたが、楓本人はそんな周囲のことなど気にかけないようにふるまっていた。僕はそんな楓にいを抱いており、ある時楓のために味方をしてしまう。そのため僕はうになってしまっていたのである。

問四 線3「誰もが僕と真悟君の会話に注目していて、じつと黙り込んでいた」とありますが、この原因は何ですか。解答らんに合うように問題文中から適当な部分を二十字以内で抜き出し、最初と最後の五字ずつを答えなさい。

問五 線4「古今集」について、ここで「真悟君」が『万葉集』ではなく『古今集』の方をあげた理由を、『万葉集』『古今集』それぞれの異なる特徴をふまえ七十字以内で答えなさい。ただし、「もみじ」「カエデ」の語を必ず使うこと。

問六 — 線5「心憎い言い回しをする」とありますが、どういう点が「心憎い」といえるのでしょうか。このことの説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 相手のことを考え、その遠慮がちな行動を遠回しに批判しているところ。
- イ 相手のことを考え、恋愛がうまくいくことを静かに祈っているところ。
- ウ 相手のことを考え、恋愛についてあからさまでなく話題にしているところ。
- エ 相手のことを考え、相手の好きな女の子を美しいものにたとえているところ。

問七 — 線6「しどろもどろになると」とありますが、このときの「僕」の心情を説明したものとして、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 真悟君に自分の本当の気持ちを言い当てられて、あわてている。
- イ 真悟君にからかわれて、どうしてよいのか分からなくなっている。
- ウ 真悟君に自分の気持ちを言うように強いられてとまどっている。
- エ 真悟君に根も葉も無いことを言われて、悲しくなっている。

問八 — 線7「迷っていた」とありますが、ここで迷ってしまうのは「僕」にどのような思いがあったからですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いつも真悟君のほうから僕に声を掛けてくれていたが、本当は僕のほうから真悟君に声をかけるべきだから。
- イ 僕といったら真悟君の良くない評判が広まるが、僕は真悟君と離れるとますます孤独になると感じていたから。
- ウ 僕は真悟君に誘われるまま一緒に行動していたが、本当は一人で楓のことを考えるほうが楽しめたから。
- エ 僕といると真悟君には悪い評判が立つのだが、僕は真悟君との満たされた時間を失いたくなかったから。

問九 — 線8「目から鱗が落ちたような気がした」の問題文中での意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今まで気になっていたことが急に解決したこと。
- イ はつきりと見えなかったものが、鮮明に目に映るようになったこと。
- ウ 今まで自分がしてきた誤りが、実は正しいことだと気づいたこと。
- エ これまでの自分の誤りに気づき、心の迷いから覚めたこと。

問十 B に入れるのに適当なことばを問題文中から探し、適当な形に改めて答えなさい。

問十一 — 線9「楓をかばった自分は、まちがいじゃないと強く確信した」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分で決めて楓を守ったのであり、楓を思う気持ちにいつわりはないことを改めて感じたから。
- イ 信念をもって自分で決めた行動であるなら、それに自信を持ち続けてよいことに気づいたから。
- ウ 自分は正義のために行動したのであり、誰にも批判されることではないと強く感じたから。
- エ 自分で決めたことを真悟君が認めてくれたので、改めて確信がもてるようになったから。

国語解答用紙

6

$\textcircled{2} \times 3$   
 .....  
 問  
 →

|   |
|---|
| 1 |
|   |
| 2 |
|   |
| 3 |
|   |

|                                                                                     |                                                                                     |
|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
|  |  |
| ③×2                                                                                 | ②×3                                                                                 |
| ⋮                                                                                   | ⋮                                                                                   |
| 問二                                                                                  | 問一                                                                                  |
|  |  |
| 問三                                                                                  |                                                                                     |
|  |                                                                                     |

#### 問四

[illegible]

問七

問六

[illegible]

|                                                                                                  |                                                                                                  |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  <p>③ × 1</p> |  <p>② × 4</p> |
| 問十                                                                                               | 問九                                                                                               |
|               | <p>ア</p> <p>イ</p> <p>ウ</p> <p>エ</p>                                                              |



③×1

問四

真悟君が

ゝ

から。



②×3

問三

あ

い

う



③×2

問一

問二

[illegible]

|     |                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 【一】 | <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%; position: relative;"><div style="position: absolute; bottom: 0; right: 0; width: 20px; height: 20px; border: 1px solid black; transform: rotate(45deg);"></div></div> |
| 【二】 | <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%; position: relative;"><div style="position: absolute; bottom: 0; right: 0; width: 20px; height: 20px; border: 1px solid black; transform: rotate(45deg);"></div></div> |
| 【三】 | <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%; position: relative;"><div style="position: absolute; bottom: 0; right: 0; width: 20px; height: 20px; border: 1px solid black; transform: rotate(45deg);"></div></div> |
| 総点  | <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%; position: relative;"><div style="position: absolute; bottom: 0; right: 0; width: 20px; height: 20px; border: 1px solid black; transform: rotate(45deg);"></div></div> |

|      |
|------|
| 受験番号 |
|      |

[illegible]